

志雲会東京第一回勉強会

テーマ：「古事記 大国主命の国譲り」 要約（その2）

松田 武

伊邪那美神を亡くして、伊邪那岐神はどうしたでしょうか。今回は伊邪那岐神の黄泉（よみ）の国往訪と三貴子誕生までを語りたいと思います。

ここで、古事記の世界観を少し述べておきます。古事記の世界は基本的に三層になっております。それは、上から高天原（天上世界）、葦原の中つ国（地上世界）、黄泉の国（地下世界）となっております。地下世界は黄泉の国と根の堅洲國に分かれているようです。古事記を読んでいくと、どうやら黄泉の国は真っ暗闇か薄暗いところで、根の堅洲國は少し明るい世界らしい、という違いがあるようですが、共に地下世界ということになっております。この基本の三層の世界のほかに、海底の国や常世の国なるものが存在します。

4. 黄泉の国

妻である伊邪那美神を亡くした伊邪那岐神は愛しき妻を忘れられず、伊邪那美神を迎えに地下世界である黄泉の国に降りて行きます。伊邪那岐神は伊邪那美神に対して次のように言います。

「愛我那邇妹命、吾與汝所作之國、未作竟。故、可還。」

うつく なにものみこと あれ いまし つくれるくに いまだつくりおえず かれ かえるべし
愛しき我が汝妹の命、吾と汝と作れる國、未だ作り竟へず。故、還るべし。

それに対して伊邪那美神は答えます。

「悔哉、不速來、吾者爲黄泉戸喫。然、愛我那勢命那勢二字以音、下效此入來坐之事恐。故、欲還、且與黄泉神相論。莫視我。」

くやしきかな とくこずて あは よもつへぐいしつ しかれど うつくしきわがなせのみこと いりきませること
悔哉、不速來、吾者爲黄泉戸喫。 然、 愛我那勢命 入來坐之事

かしこし かれ かえらむとおもう しばらくよもつかみとあげつらはむ あをなみたまいそ
恐。 故、欲還、 且與黄泉神相論。 莫視我。

即ち、伊邪那岐神は伊邪那美神を黄泉の国より連れ戻そうとしますが、伊邪那美神はすでに黄泉の国の食べ物を食べてしまったので、もう地上には戻れないと言う。でも、一縷の望

みをかけて、黄泉の国の神様に相談してみるのも、しばらく待ってください。ただし、私を見ないでください、と伊邪那美神は伊邪那岐神に伝えます。

しかしながら、視るな、と言われると見たくなるのが悲しいかな男の性。伊邪那岐神は髪に付けていた櫛の歯を一本取って火を点けて伊邪那美神を覗き見てしまいます。そこには蛆が湧いた伊邪那美神が横たわり、体のあちこちに雷（いかずち）なる魔物が取りついていましたのです。それを見て伊邪那岐神はびっくり仰天、そこから逃げ出します。伊邪那美神は「令見辱吾。」われにはじをみせつ、と怒り、遣豫母都志許賣（黄泉醜女 よもつしこめ）を遣わして、伊邪那岐神を追いかけさせます。

伊邪那岐神はいろいろなものを黄泉醜女に投げつけ這う這うの体で地上に逃げ帰ります。地上に出た伊邪那岐神は黄泉の国の入り口に千引岩を置いて黄泉の国の出口を塞いでしまいます。その岩を隔てて、伊邪那岐神と対峙した伊邪那美神は「愛しき我が汝妹の命、かく為せば、汝の国の人草、一日に千頭絞り（くぶり）殺さむ」と恨み言を言います。それに対して、伊邪那岐神は「吾一日に千五百の産屋を立てむ」と応酬します。これから、人は一日に必ず千人死んで、一日に必ず千五百人に生まれるようになった、と古事記には述べられています。人草（ひとくさ）とは人間のことで、古事記では人間は“草”として表現されています。



千引岩の様子

ともかく、醜い姿を見られ、恥をかかされた伊邪那美神の怒りと悲しみは相当強いものがあつた、ということがここで分かります。我が国の神道において「死を穢れ（けがれ）」

とする考え方は、伊邪那美神の死後の醜い姿によるものだとも言われております。

5. 三貴子の誕生

地上に戻った伊邪那岐神は、死の世界に出かけて穢れた体を禊（みそぎ）によって浄化します。伊邪那岐神はすべての禊を終えたあと、底筒之男命、中筒之男命、上筒之男命という三柱の神を生みます。これは摂津の住吉の三神であります。

その後、左の御目を洗われた時、天照大御神（あまてらすおおみかみ）がお生まれになり、右の御目を洗われた時、月讀命（つくよみのみこと）がお生まれになり、御鼻を洗われた時、建速須佐男命（たけはやすさのおのみこと）がお生まれになります。このとき、伊邪那岐命はたいへんお喜びになり、

あはこをうみうみて　うみのはてにみはしらのとうときこをえつ
吾者生生子而、　於生終得三貴子。

おっしゃいましてと、天照大御神には高天の原を知らせ（統治せよ）、月讀命には夜の食國（おすくに）を知らせ、と命じられました。次に建速須佐男命には海原を知らせ、と命じられました。

この海原とは地球のことであると考えられます。と言いますのは、地球が誕生した際、地球全地の表面が海であった、と言われております。その後、表面が乾いて陸地が現れて来ましたが、いまでも地表全体の71%は海であります。従って、建速須佐男命は地球創造の当初にいて、地球の霊魂であった、と言えます。

ところが、建速須佐男命は伊邪那岐神の命令を受け入れず、泣いてばかりいます。それを古事記は「その泣くさまは、青山は枯山のごとく泣き枯らし、河海は悉く泣き乾しき。ここをもちて悪しき神の音（こえ）は、さ蠅如す（さばえなす）皆満ち、萬の物の妖（わざわい）悉くおこりき。」という惨憺たる状態を招きました。

そこで、伊邪那岐神は建速須佐男命に対して「どうして泣いてばかりいて、汝が統治すべき国を治めないのか」と問いただしたところ、「自分は母の国、根の堅州國に行きたい、それで泣いています」とお答えになられた。

それを聞いて伊邪那岐神はたいへんお怒りになられて、建速須佐男命に対して「然らば、汝はこの國に住むべからず。」と命じられ、追放（かむやらい）されてしまいます。原文は以下の通りです。

爾伊邪那岐大御神大忿怒詔「然者、汝不可住此國。」乃神夜良比爾夜良比賜也。



三貴子のイメージ

(続く)

なかなかテーマである「大国主命の国譲り」の話にはなりませんね。しかしながら、どうやら古事記の上巻のメインテーマは「大国主命の国譲り」のようであります。したがって、建速須佐男命の追放のお話など、ほとんどの逸話は「大国主命の国譲り」に至る伏線のようにあります。そこで、この伏線をキチンと押さえておく必要がある、と考えております。